

浮世の画家

カズオ・イシグロ

Kazuo Ishiguro

飛田茂雄訳

Shigeo Tobita

中央公論社

Kazuo Ishiguro
An Artist of the Floating World

浮世の画家

An Artist of the Floating World

カズオ・イ

カズオ・イ 田茂雄 訳

Shigeo Tob

カズオ・

An Artist of the Floating World by Kazuo Ishiguro

© 1986 by Kazuo Ishiguro

Japanese translation rights arranged with Deborah
Rogers Ltd. through The English Agency (Japan) Ltd.
Japanese edition © 1988 by Chuokoron-Sha, Inc.

浮世の画家

定価一四五〇円

昭和六十三年二月十五日 初版印刷

昭和六十三年二月二十五日 初版発行

著者 カズオ・イシグロ

訳者 飛田茂雄

発行者 嶋中鵬二

印刷所 図書印刷

製本所 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目一七

振替東京二一三四

© 一九八八 検印廃止

ISBN4-12-001647-1

浮世の画家

兩親

一九四八年十月

このあたりでは今でもへためらい橋と呼ばれている小さな木橋のたもことから、丘の上までかなり急な坂道が通じている。天気の良い日にその小道を登りはじめると、それほど歩かぬうちに、二本並んでそびえ立つ銀杏いちょうの梢こずえのあいだからわたしの家の屋根が見えてくる。丘の上でも特に見晴らしのよい場所を占めているこの家は、もし平地にあったとしても周囲を圧倒するほど大きいので、たぶん坂を登る人々は、いったいどういいう大金持ちがこんな屋敷に住んでいるのかと首をかしげることだろう。

いや、そんな家に住んでいるからといって、わたしは決して金持ちではないし、かつて金持ちだったというわけでもない。この家はわたしではなく、前の住人が——ほかでもない、あの杉村明が——建てたものだと言えば、みんななるほどとうなずくではあるまいか。もちろん、最近この市に転居してきた人なら杉村明と言われてもピンとこないだろうが、戦前からこの市に住んでいる人々に聞いてみればすぐわかる。だれもがはつきりと、その杉村さんなら三十年ものあいだこの市でだれよりも尊敬されていた最高の実力者でしたよ、と教えてくれるに違いない。

だが、こういう話を聞いたあとで丘のてっぺんまで登りつめ、そこから、堂々たる杉の門、がっしりとした石塀で囲われた広い敷地、優美な瓦ぶきの屋根、大空に張り出した風格のある棟木などを見下ろした人は、金持ちではないと言ったこのわたしがどうしてこんな大邸宅を手に入れ

たのかと、ますます不思議がるかもしれない。実を言うとわたしは、とても代金とは言えぬくらいのも——おそらく当時の相場の半分にも満たない——金額でその土地家屋を買った。杉村家の人が取り決めた実に奇妙な、というか、ばかげたとさえ言えそうな売却手続きのおかげで、そんなことになったのである。

もう十五年くらい前の話になる。そのころ、わが家の暮らしは月を追うごとに楽になっていくように思われた。おかげで、妻が新しい家を探してくれとしきりに催促するようになった。いつも先を見越していた妻は、ただの見栄ではなく、子供たちの縁談をうまくまとめるためにも地位にふさわしい家に住むことが大事だと言い張っていた。なるほど一理あるとは思ったが、なにしろいちばん年上の節子でさえまだ十四、五歳だったので、そうあわてることもあるまいと、のんびり構えていた。もっとも、一年ばかりのあいだ、よさそうな売り家があると聞いたびに、いちおう当たってはみたのだが。杉村明が亡くなって一年後、彼の家が売りに出されるのでぜひ、とすすめてくれたのは弟子のひとりであった。わたしみたいな者がそんな大邸宅を買うなんてばかげた話で、これも弟子たちがいつも示す大げさな敬意の表れに過ぎないと思ったが、型通り問い合わせだけはしておいた。それが、思いもよらぬ結果を招いたのである。

ある日の午後、ずいぶん気位の高そうな白髪の女性がふたりわたしをたずねてきて、杉村明の娘と名乗った。有名な方のご家族からごあいさつを受けて驚きましたと告げると、年上の婦人のほうが冷ややかな口ぶりで、これはただの儀礼訪問ではございませんと言う。よく聞いてみると、

ここ数カ月のあいだに杉村邸を買いたいという申し出がかなりたくさんあったけれども、家族会議の結果、四人の候補者以外はみな断ることにしたという。そしてその四人は、もっぱら人柄と社会的な功績だけを慎重に評価して選んだとのことであった。

「わたしどもにとってなによりも大事なことは」とその婦人は言った、「父が建てた家を、それにふさわしい、父ならこの人と見込むような、立派な方にお譲りすることです。もちろん、いろいろな事情で金銭的な面も考えざるを得ませんが、それはあくまでも二の次です。まあそういうわけですから、価格はこちらで決めてまいりました」

そのとき、最初から黙りこくっていた年下の婦人がわたしに封筒を差し出した。わたしがその封を開けるあいだ、姉妹はこちらをきびしい目で見つめていた。封筒のなかには紙が一枚入っており、真っ白な地に毛筆で品よく金額だけが書いてあった。わたしはあまり低い金額に驚いて、そのことを言いかけたが、目の前のふたりの表情からすると、それ以上お金の話をしたら品性を疑われそうなので、ただ黙っていた。すると年上の婦人がきっぱりと言った、「四人の方がおたがい値段を競り上げて、どなたのお得にもなりません。わたしどもはそこに書きました額以上は一円だって頂戴するつもりはございません。これから先、わたしどもにお任せいただきたいのは、ご人徳のせり、でございます」

その婦人はわたしが——もちろんほかの三人の候補者と同じ条件で——家柄や人望などに関するさらに立ち入った調べにに応じてくれるよう、杉村家を正式に代表してお願いにきたのだと言っ

た。調査の結果、最適と思われる人に家を売りたいというのである。

常識外れな申し出だとは思ったが、こちらから異議をさしはさむ理由は見つからなかった。考えてみると、縁談でも持ち上げれば事は同じように運ぶのだ。だいいち、頑固に筋を通そうとするこの有名人の家族から有力な候補者に選ばれて悪い気持ちはしなかった。調査には応じると答え、来訪に礼を述べると、年下の婦人のほうがはじめて口をきいた。「小野さま、父は教養人でございます、画家の方々をたいへん尊敬しておりますの。ええ、あなたのお仕事のことも存じておりました」

翌日から幾日かかけて自分で調べた結果、この女性の話にうそはないことがわかった。たしかに杉村明はなかなかの美術愛好家で、自分のポケットマネーで多くの美術展覧会を後援していた。ついでに、わたしはいくつかの興味深いうわさを耳にした。それによると、杉村家の親族の有力な一部は家を手放すことに反対し、売却推進派を相手に一時激しく言い争った。そのうち、経済的な事情でどうしても売るしかないということになったが、あくまで渋っていた人々を説得するための苦肉の策として、だれかがい言った奇妙な手順を考え出したらしい。その取り決めに高飛車なところがあったことは否定できないが、栄光の歴史を誇ってきたこの一族の悲哀に、わたしは同情しないではいられなかった。ところが妻のほうは、相手が家柄などを調べると知って、とたんに不機嫌になった。「思えばいいところですよ」と妻はいきまいた。「これ以上のつきあいはご免だと、きっぱりおっしゃって」

「べつにどうってこともあるまい」とわたしは言い返した。「知られて困るようなことがあるわけじゃなし。そりゃ、うちの身内に財産家はいないが、それくらい杉村家だってとうに知ってるはずで、しかもなお、うちを有力な候補と認めているんだ。せっかく調べたいと言うんだから、調べてもらおうじゃないか。うちがますます有利になるような事実しか出てこないんだから」ここでわたしはひとつ大事なことをつけ足した。「まあ考えてごらん。かりに杉村家との縁談が持ち上がったとしたら、相手はまったく同じことをするわけだ。うちもそろそろこういうことに慣れておいたほうがいい」

おまけに、杉村家の姉娘が「人徳のせり」と呼んだものは、なかなかの名案であるように思われた。物事の決着をつけるのになぜもつとそういう手段を活用しないのか。人の財布の重さを比べるよりも、道徳的な行動や社会的な功績を比べるほうがはるかに、はるかに、すばらしいではないか。わたしはいまでも、杉村家からの知らせ——「徹底的な調査の結果、かけがえのないあの家の新しい持ち主としてあなたこそ最適と判断しました」という知らせ——を受けたときの、あの深い満足感をはっきりと思い出す。そして実際、この家は多少の苦痛を忍んでも手に入れるだけの価値があった。外から見れば威圧されるほどどっしりした建物だが、なかに入ると、木目の美しさで選んだ柱や板がごく自然でやわらかな雰囲気（か）を醸し出すので、ここに住んだわたしはみな、この家のおかげでゆったりと落ち着くことができる、としみじみ感じたものだ。とはいうものの、売買契約が最終的に成立するまでの一時期には、杉村家の高慢さを事ごとくに痛感さ

せられた。彼らの一部はわたしたちへの敵意を隠そうとしなかった。相手の立場を理解できない買手ならば、むかつ腹を立てて一切をご破算にしたかもしれない。あれから数年後にたまたま杉村家の人に出会うことがあったが、そんな時でさえ彼らは世間並みのあいさつをする代わりに、道端にぬっと立ったまま、あの家はいまだどんな状態か、どこか改造したのかなどとわたしを問い詰める始末であった。

このごろは杉村家の消息を聞くこともほとんどなくなった。ただ、売却交渉で顔見知りになつたあの杉村姉妹のうち、妹のほうが敗戦後まもなくわが家を訪ねてきた。長かった戦争中の苦勞のせいでやせ衰え、いちだんと老けて見えた。ところが、この婦人も杉村家のほかの人々とそっくりで、旧杉村邸にしか関心がないという事実をほとんど隠さず、戦争で——住んでいる人間ではなく——建物がどうなったかということばかり気にしていた。彼女はわたしの妻と賢治のことを知っていたくせに、おざなりのお悔やみをひと言つぶやいただけで、すぐ空襲の被害についての質問を浴びてきた。最初はむかつきたが、この老婦人が思わず客間のあちこちに目をやることや、型にはまった計算ずくの会話の途中で何度か不意に声を詰まらせることに気づくうちに、なつかしい家を訪れたこの婦人の激しい感情の波が理解できるようになった。そして、この家の売却に関わつた家族の大半がもはやあの世の人だと思ふと同情が込み上げてきて、進んで家を案内して回る気になった。

わが家もやはり戦災を免れなかった。その家だが、杉村明は東側に三つの大きな部屋から成る

別棟を建て、母屋とのあいだを長い廊下でつないでいた。庭の片側に面したその廊下はあきれるほど長いので、口の悪い連中は、あの廊下と東の棟は杉村が隠居した両親をわざと遠ざけておくために建てたのだと言いはやしたものだ。とにかくその廊下は、この家全体のなかでも最も魅力的なもののひとつであり、特に午後になると、廊下の端から端まで明るい日差しがなかに枝葉の影がきれいな模様を描くので、まるでガーデン・トンネルをくぐっているような気分になったものだ。爆撃の被害は主としてこの東棟に集中しており、庭からそのありさまを眺めている杉村明の娘の目にはうっすらと涙がにじんでいた。わたしもこの老婦人に対するいらだちをすっかり忘れ、ここはなんとかして最初に修理し、お父上が建てられた元の姿に戻しますと、ありったけの誠意をこめて約束した。

ただし、そう約束した時点では、物資のひどい欠乏がどれほどつづくのかよくわかっていなかった。敗戦後何年ものあいだ、たった一枚の板やひと握りの釘を手に入れるために何週間も待たされるような状態がつづいた。そんな状況でいくらか大工仕事ができるとしても、まず（震災を無事に免れたわけではない）母屋から手をつけるしかなく、庭に面した長廊下と東棟の修理はなかなか思うように進まない。重大な破壊や腐食を招きそうな部分には応急処置をほどこしたが、東の棟をふたたび使用できるのはまだまだ先の話だ。それに、いまこの家に残っているのは紀子とわたしだけなので、無理をしてまで急いで居住空間を広げる必要を感じない。

かりにきょう、人々をわが家の奥に案内し、重い障子を開いて杉村庭園に面した長廊下の残骸

だけを見せたとしても、彼らはそれがかつてどれほど優雅なものであったか、十分に想像できるだろう。もっとも、きょうまでまだ取り除けないでいるクモの巣やカビのしみにも気づくことだろう。おまけに、屋根がなく、防水シートだけでかろうじて雨漏りを防いでいる天井の大小の穴にも。ときたま朝早く障子を開けてのぞくと、防水シートを通して無数の色つきの柱のような形で日光が射し込み、雲のように浮かんでいるちりやほこりを見ることがある。それを見るたびに、たったいま天井が崩れたばかりという錯覚に陥る。

この廊下と東棟を別にすれば、最大の被害を受けたのはベランダである。戦災の前、わたしの家族、特にふたりの娘は、年がら年じゅうベランダに座って、何時間でも庭を眺めながらおしゃべりを楽しんでいた。それだけに、嫁よめぎ先から戦後はじめて里帰りした節子がベランダのみじめなありさまを眺めて涙ぐんでいるのを見たとき、嘆くのも無理はないと思った。わたしはそれ以前にいちばんひどいと思われる部分は直しておいたが、庭に張り出した部分の片側は爆風によってあおられていたので、大きく波打ち、床板は至るところひび割れていた。ベランダの屋根もやられており、雨の降る日には床のあちこちに洗面器を置いて雨漏りを受けなければならなかった。それでも、ここ一年のあいだに作業はかなりはかどり、先月あらためて節子がやってきたときには、ベランダの修理はほぼ完成に近づいていた。紀子は姉をもてなすために勤め先から休暇をとった。上天気がつづいたおかげもあって、娘たちは昔と同じようにベランダで長い時間を過ごした。わたしもたびたび仲間入りしたが、おかげで、数年前まで晴れた日に家族揃ってそこに座

り、のんびりとたわいのない話に興じたのと同じような気分になることができた。ところで、たしか節子が来た翌日だろう、朝食後に三人でベランダに座っていたとき、紀子がこんなことを言い出した――

「やっと来てくれて助かったわ、節子。少しはお父さまから解放してくれるでしょうね」

「まあ、そんな……」節子は座布団ざぶとんの上でもじもじと腰の位置を変えた。

「お父さまったら、隠居してからとっても世話が焼けるの」と、紀子はいたずらっぽく笑ってつづけた。「いつも忙しい用事を言いつけておかないと、すぐふさぎ込むんだから」

「まあ……」節子はおずおずとほほ笑み、軽いため息を漏らして庭のほうに顔を向けた。「あの楓かえで、すっかり生き返ったらしいわね。とってもきれい」

「ねえお父さま、このごろお父さまがどんな様子か、節子には見当もつかないんじゃない？ 暴君ぶりを発揮して、みんなをあごで使っていたころのお父さましか知らないんだもの。このごろはずいぶんおとなしくなったわ。そうじゃなくって？」

わたしはすべては愉快な冗談だと思わせるつもりで、大声で笑ったが、節子は相変わらず浮かぬ顔をしていた。紀子は姉のほうに向き直って言った、「でも、前よりずっと世話が焼けるの。一日じゅうふさぎ込んで、家のなかをうろろするばかりなもの」

「相変わらずのばか話さ」とわたしが割って入った。「一日じゅうふさぎ込んでいる人間が、どうやってこれだけの修理をやっているんだね」

「ほんとうに」と節子は言いながら、わたしのほうを向いて笑顔を見せた。「この家とてもすてきになったわ。お父さま、ずいぶん精出してお働きになったのね」

「面倒なところはみんな人手を借りてるのよ」と紀子は言った。「ねえ節子、あたしの言うことが信用できないらしいけど、お父さまはすっかり変わってしまったの。もうこわがる必要はないのよ。前よりずっと穏やかで、餉い慣らされたって感じ」

「まあ、紀子ったら……」

「時にはおさんどんまでするし。どう、とても信じられないでしょ。でもほんと。このごろお料理の腕がぐんと上がったわ」

「紀子、もうそのくらいで十分じゃない」と節子が静かにたしなめた。

「そうじゃなくて、お父さま。たいへんな進歩よね」

わたしはまた苦笑して、首をだるそうに左右に振った。いま思い返すと、ちょうどそのときに紀子が庭のほうに顔を向け、まぶしい太陽の光にまぶたを閉じてこう言ったのだ――

「だって、あたしがお嫁に行ったら、帰ってきて食事の支度をする人がいなくなるんだもの。あたしだっていろいろ忙しくなるから、お父さままでは手が回らないわ」

紀子がそう言っているあいだに、先ほどから慎重しく目をそむけていた長女が、さっと探るような眼差しをわたしに向けた。その目はすぐまたそれで、紀子の微笑にお義理の笑みを返したけれども、節子の様子からはさつきよりもいっそう強いたたまれなさが感じられた。だから、幼

い孫がペランダをどたどたと走り抜けたときには、話題を変えるきっかけをつかんでほっとしたように見受けられた。

「一郎、お座布団にお座りなさい」と節子は息子の背中にも声をかけた。

両親といっしょに住んでいるモダンなアパートに慣れていた一郎は、きつとわたしの家の広い空間がとても気に入ったのだろう。とにかく彼はペランダに座りたがるわたしたちの気持ちを理解せず、端から端まで猛スピードで往復し、時には磨きたてた床板の上で滑走することを好んでいたらしい。彼はお茶をのせた盆を二、三度ひっくり返しそうになったが、みんなといっしょに座れという母親の言いつけには全然耳を貸そうとしなかった。節子が座布団に座れと言ったときも、ペランダの向こう端でふくれ面をするだけであった。

「おいで、一郎」とわたしは声をかけた。「さっきから女と話するのに飽きてしまった。ここへ来ておじいちゃんの横に座っておくれ。ふたりで男らしい話をしよう」

きき目はすぐ現れた。一郎はわたしのそばに座布団を運んでくると、両手を腰に当て、背中をぐいと反らせて、えらく偉そうな顔をして見せた。

「おじいちゃん」と彼は生真面目な調子で言った。「ぼく、ききたいことがあるの」

「ほう、なんだろう」

「かいじゅうのこと」

「怪獣？」